

第七回星野立子新人賞

「去りぎは」

小野あらた

落花生目抜き通りは海に着き
思ひ出す秋思新たに湧く秋思
新涼の舳先に潮の跳ねにけり
岸釣の帽子目深に女かな
秋晴や烏の羽根の白き芯
秋暑し何か光る壺の底
一枚の水を踏み割る白露かな
境内の古きポストや赤のまま
人体は対称ならず水澄めり
鰯雲沢の削りし崖の丈
蕎麦の花雲より遠き孤峰かな
木の実降る奥宮までは人の来ず
梨剥けるまでの緑茶を出しにけり
蜻蛉や脇より入る中華街
地下鉄の改札口に菊並ぶ
重陽や寺の庵は香を焚き
秋風や糸の緩める和綴本
菊供養胸の高さに受取りぬ
薑のうすくれなゐを噛みにけり
稲刈りを終へたる土の匂ひかな
一口の神酒に秋蝶来たりけり
松手入松の匂ひの鉄鉢
新藁の中のかそけき粒に触る
ばったんこ水に中心生まれけり
彫金の英字の光豊の秋

渡り鳥来て夕暮の来てをりぬ
墓地までの道の明るき柿紅葉
行く秋の姿煮を裏返したり
階段を夜食を持つてのぼる音
うそ寒のソファ―に寝返りを小さく
頂に灯火一つ轡虫
ちぎり絵の厚みに兆す秋湿り
切手ほどの窓が一枚榎櫃の実
霧時雨駅の時計の狂ひなく
初冬のガラスに映る青磁かな
大根畑明るき水をはりめぐらせ
桐箱に使ひ道無き文化の日
乾鮭の歯の黒々と尖りけり
鍋蓋の土の厚みや冬の空
我が心ストーブの火の中にあり
ウイスキーに闇の染み入る目貼かな
参道のうやむやになる酉の市
去りぎはの湖の広さよ芭蕉の忌
冬の蝶光浴ぶれば消えさうな
洗剤の匂ひの移る懐手
灯台の跡の巖や冬日向
冬の梅花瓶の底に当りけり
冬麗の泉の底に幹尖る
大鷹や空中の風隠れたる
爪ほどの白さの日記果てにけりさ